

# 京都大学建築論へのアプローチ

## 全体的な俯瞰と場所と制作に関する覚書

鈴木 浩史\*

(令和7年10月31日受付)

### Approaching the Architectural Theory of Kyoto University : with Notes on Place as a Field of Relations and the Realization of Latent Spatial Order

Koshi SUZUKI

(Received October 31, 2025)

#### Abstract

京都大学の建築論は、森田慶一が提示した包括的概念を基点として成立し、その後、現象学的視座を取り入れることで生活世界に根差した空間理解を深化させてきた。しかし、原理的探究の進展は、同時に理論の高度な専門化を招き、近づきたい側面を帯びるに至った。本稿はその展開を概観したうえで、建築空間を「場」として理解する思考の意義を検討し、さらに制作を潜在的秩序の生成として捉える動的視点に注目する。これにより、場所と制作の関係を再定位し、今後の建築論における展望を提案する。

The architectural theory developed at Kyoto University originates in Keiichi Morita's attempt to establish a comprehensive conceptual foundation for architecture. Subsequent discussions incorporated phenomenological perspectives, deepening the understanding of architectural space through a return to the lived world. However, this development also led to increasing theoretical abstraction and specialization, making the discourse difficult to approach from the outside. This paper surveys that trajectory and examines the shift toward understanding architectural space as *place*—not as a container, but as a field of relations in which the world becomes present. It further considers the question of *making* not as the creation of new form, but as the articulation of potential spatial order through generative composition. By clarifying the relationship between place and making, the paper proposes a direction for re-situating architectural theory as a practice grounded in both experiential and cultural dimensions.

**Key Words:** Kyoto School of Architectural Thought; Place as a Field of Relations; Spatial Articulation; Generative Composition; Phenomenology

京都大学における建築論は、しばしば難解とみなされ、敬遠されがちな側面をもつ。しかしその背後には、長年にわたり積み重ねられた知的営為があり、建築をより深く理解する上で看過できない意義を有している。

本稿は、その系譜と思想的背景を手がかりに、京都大学建築論の特質を再検討しようとする試みである。結論を導くことを目的とするのではなく、むしろ今後の検討に資するための予備的覚書として、以下の七つの章から若干の整理と考察を行う。

#### I 建築論における理論と実践の交錯

- II 建築についての包括的観念（語源的整理）
- III 現代思潮が建築論に及ぼす示唆
- IV 知覚的場から引受的場への転換と共同体・歴史の継承
- V 生活世界から生成世界へ——制作の哲学の展開
- VI 総括—建築論の自制的視座

#### I. 建築論の理論と実践の交錯

##### 1. 建築論の目的

京都大学における建築論は、日本におけるモダニズムの

\* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

黎明期に、新しい概念としての「建築」の全体像を把握しようとした森田慶一の試みにその端緒を見いだすことができる。当時の時代状況をふまえれば、理論と実践とが別々に展開される余地はほとんどなかったと考えられる。むしろ理論は、実践の根拠を問い直し、その内的必然を明らかにしようとする営みとして、両者は相互に深く結びついていたといえよう。

その後、研究の深化とともに、京都大学の建築論はしだいに理念的・哲学的傾向を強めていった。本章では、この過程において理論と実践の関係がいかに保たれ、あるいはどのように乖離していったのかを検討する。

## 2. 森田慶一 (1895-1983) の場合の場合<sup>1)</sup>

京都大学建築学科が創設されてから三年後の1923年、森田慶一は内務省勤務を経て同学科に着任した。森田は晩年の1978年に主著『建築論』を著している。これは建築論に関する三編と翻訳一編から構成され、「建築論概説」「建築論の特殊問題」「西洋建築思潮史」「エウバリノス」を収めるものである。これらは建築の基本概念、歴史、そして制作に関わる内容を包括しており、第二次大戦後にはすでにその草案がまとめられていたとされる<sup>2)</sup>。従って、森田の長年の研究が体系的に集約された著作である。

「建築論概説」および「建築論の特殊問題」において、前者は建築のあり方を全一的に把握しようとする理論的試みであり、後者は「内から見た建築の問題」として、形式や造形理念の多様性を独立した課題として論じている。また「西洋建築思潮史」は、国内における既往研究が限られていた時代にあって、西洋建築史の広範な展開を概説した貴重な業績である。森田の世代、あるいはそれ以前の日本の研究者にみられるように、森田もまた一人で極めて広い研究領域を扱い、日本の建築論の創設者としてふさわしい存在である。

森田の筆致は偏ることなく冷静でありながら、深い洞察に満ちている。特に注目されるのは、学術的な論考にとどまらず、ヴァレリーの文芸作品『エウバリノス』を併録した点である。それにより、森田の建築への知的関心とともに、建築を芸術的創造の場として捉える生き生きとした姿勢が伝わってくる。

森田は建築論の目的をどのように捉えていたかについて、次のように述べている。

建築の目指すものは、人間の生存・生活のすべての面に係わり、人間そのものに密着していて、途方もなく複雑なのである。だから、「建築する」という造物行為は多面的な目的に向かってなされ、結局建築という一つの作品を生むのである。この終局目的に達するために多くの目的系列を整理し、建築を全一的に把握しようとする知的欲求が生ずるのは当然である。建築論

はこの欲求に応じようとするものである。<sup>3)</sup>

この記述から、森田において建築論はあくまで「造る側」からの視点、すなわち制作行為に内在する知的欲求に基づくものであることがわかる。さらに森田は次のように続ける。制作者、特に建築家、の側に立てば、かれらは、建築論に単なる観念的な理論だけでなく、おそらく多少とも実際の制作に役立つ指針・規範を求めらるだろう。建築論は、あるいは、このような要求に応ずる面を含みうるかもしれない。しかし、それは建築論が制作において建築家に反省の道筋を示すことができるということであって、制作が建築論によって直接規制されたり指導されたりするということではない。<sup>4)</sup>

ここでは、建築論が制作を規範的に導くものではなく、むしろ制作における主体の反省を促す理論的契機であることが示されている。したがって森田にとって、制作における主体性と自由は建築論とは並行的に存在するものであり、理論が制作を拘束することはない。森田は次のようにも述べる。

建築論は、あくまで建築を全一的に把握しようとする理論的要求に応じようとするものであって、建築家に何か規範的な知識を与えるのが本旨ではない。<sup>5)</sup>

すなわち、建築論の役割はあくまで理論的な探求の範囲にとどまり、制作そのものを指導する実践的規範ではない。森田の立場は、建築が社会の中で適切に機能し存続していくために、制作の主体に自己省察を促す契機として建築論を位置づけるものであった。

さらに「むすび」において、森田は次のように述べる。

真に建築の本質を把握するには、建築を人間の広汎な営みの一つの顕れ、人間文化の一環、としていわば建築の外なるものとの関連においても眺めることが必要であろう。<sup>6)</sup>

この言葉に見られるように、森田の建築論は「建築とは何か」という問いに対して、外界との関係においてその本質を照らし出そうとする探究の道を開くものであった。そこには、建築を理論的に閉じるのではなく、むしろ未知の地平へと踏み出す意欲的姿勢を読み取ることができる。

このような森田の関心は、美学者・深田康算を通して哲学・美学へと接近していったことにも示されている。また、森田がワイトルウィウスをはじめとする西洋古典の一次資料に直接接触したことも、建築論の思想的展望を広げる重要な契機となったといえよう。

しかし、建築の超越性への関心は、南洋群島調査に端を発しながらもその結果に十分に納得できなかったようである。<sup>7)</sup> こうした問題意識は増田友也によって継承され、さらなる展開を見せることとなった。

## 3. 増田友也 (1914-1981) の場合

空間現象に関心を寄せた増田友也の学究の歩みは、「未

開民族の儀式的の場所」に端を発し、その概要は『建築論事典』の「増田友也」の項および『建築的場所論の研究』序論に詳しい。ここで問題としたいのは、増田の思想そのものではなく、建築論の目的に関わる視点であるため、詳細な研究経緯についてはここでは立ち入らない。

増田がわれわれに提示した核心は、次の一句に象徴されている。

本源や原理を見分ける術、それが architectōn であり、architectonicē technē である・・・<sup>8)</sup>

この言葉の背後にあるのは、建築を何らかの特定の対象に限定することを拒み、むしろ「建築する」という行為そのものの原理を問おうとする姿勢である。言い換えれば、建築とはあらかじめ定められた対象に限るものではなく、対象そのものを一度消去し、行為の出发点において再び世界との関係を組み立てようとする営みである。

このような思考の徹底は、建築論を実践の座標から切り離し、理解や共感の手がかりを遠ざけることにもなった。建築論が「何に向けて」語られているのかが見えにくくなる点で、増田の立場は一種の孤高を帯びているといえよう。

もっとも、増田はそこに至る詳細な記録を残しており<sup>9)</sup>、語源的探究を通して建築の原理を明らかにしようとした。だが、その精緻な思索が、今日の建築実践においてどのような意味を持ちうるのかは、改めて考えるべき課題である。たとえ理念として机上で確立されても、現実社会の中で「何を引き受けるのか」という問いは、増田自身が明確に答えぬまま後進に委ねたように見える。その姿勢は、ある意味で「君たち次第だ」と語る古き良き時代の学風を思わせる。

森田が、理論的・社会的概念基盤が未整備な中で、建築の位置を社会に定めようとしたのに対し、増田は現象学的視点を先駆的に導入しながらも、結果として建築論を社会から遠ざけてしまったとも言える。理論が深化するほどに、現実との接点を失っていく——その矛盾を抱えた研究の軌跡は、今日あらためて検討すべき課題であろう。

なお、一般的な語源的考察については、次章において改めて論じる。

一方で、増田は新入生に向けて、設計者としての実際家の一面を垣間見せる言葉を残している。

Architecture というのが物だ<sup>まつ</sup>というふうには考えないように。それから architect というのは、最終的に architect としてもものをつくるのではなくて、ものをつくる時には、それは oikodomikē 造家術、家をつくる術を心得た、そうしてそれは理屈では教えるわけにはいかない。そうではなくて熟練、経験、そういうことであなた方自身が身に付けうる事柄だというわけです。<sup>10)</sup>

この言葉には、増田の実践者としての一面が率直にあらわ

れている。増田にとって「建築」とは単なる物的成果ではなく、行為のなかで形成される知であり、oikodomike はその都度の制作過程の中で結果的事実を達成することであったといえる。

理論と実践は、増田の内において必ずしも分離されたものではなかっただろう。むしろ、理論が先に世界の見方を開き、実践がそれに追いつくことで両者が往還する、という構図を思い描いていたのかもしれない。その意味で増田にとっての「実践」とは、理論の成果を応用する場ではなく、理論の真価を確かめ、再び問い直すための場であったと考えられる。

#### 4. 前川道郎 (1931-2000) の場合

この項で取り上げるのは、「学としての建築論とその研究の道」と題された、昭和 59 年度建築歴史・意匠部門研究協議会資料の冒頭に置かれた前川道郎による論考である。前川は森田慶一から増田友也と同様に直接指導を受けた一人であり、当時、九州大学に所属していた。

前川はその中で、建築論研究のあり方について次のように述べている。

建築論の研究には複数のアプローチがありうる。・・・一つは史的な一現代も含む—建築や建築理念を素材として、いわば実証的に建築のありようを理論づける道であり、他は・・・建築の本源性を洞察する深い思想に基づいた精緻な論理体系を論証的に構築する方法である。<sup>11)</sup>

このうち後者の立場を前川は特に重視し、それらを「建築史学」と「建築哲学」から構成されるべきものと位置づけ、さらに「建築原論」と命名することを提言している。

この新しい提案（最終的には提言にとどまったようである）が目指したのは、森田が示した理念、すなわち「建築を全一的に捉えて、その本質を明らかにしようとする理論的・体系的考察」<sup>12)</sup>であった。

しかし、この理念は森田が『建築論概説』の冒頭で導入的に設定したものであり、具体的内容に踏み込む前の前提的立場にすぎない。前川がこの段階を「十分」と見なしたことは、見方を変えれば、建築論研究がすでに一定の軌道に乗り、改めて根拠を問い直す必要を感じていなかったことの表れともいえる。

とはいえ、そこには森田が重視した「建築論が制作において建築家に反省の道筋を示す」という視点が見られず、理論と実践の関係が希薄になりつつあることがうかがえる。

前川は次のようにも述べている。

学問とは本来虚学であったし、またそうであってよい。・・・学としての建築論は実用の学を超えたところに成立する。あるいは実用の学の基底に成立する、といってもよい。<sup>13)</sup>

この言葉に見られるように、建築論は「学としての純粋性」を求めるあまり、実践を「実用の学」として切り離す方向へ傾いていた。森田において理論は制作の内に反省の契機として働いていたが、前川の段階ではその結びつきはすでに省みられていない。すなわち、そのとき京都大学建築論においては、理論的深化の一方で、制作や実務との往還的關係が後退していたという学問的状況を読み取ることができる。

## 5. 玉腰芳夫 (1938-1984) の場合

増田友也は、玉腰に対して現象学的思考に本格的に取り組むことを勧めた。そこから玉腰は、日本の建築空間を歴史的領野の中から、独自の建築論的考察を展開していくこととなった。玉腰は、日本建築に潜在する場所秩序を通して、私たちの世界認識そのものを再考する必要性を強く意識していた。

我々は歴史を遡向し、場所的秩序の根源的意味発生の現場に立ち会い、「疑似体験」的にその大地の生きた働きを生き直す必要がある。かかる営為こそ、今日の足元を見直す課題を担った建築論に要請されている。・<sup>14)</sup>

この言葉に見られるように、玉腰の関心は歴史的素材を扱いながら、事実の積み上げからアプローチする建築史とは異なり、そこに開かれた場所に立ち会う「生の再体験」として共時的に場を生きることの解明を志向していた。玉腰にとって建築とは、歴史を通じた場の秩序を読み解きつつ、現代における「すまい」の在り方を根底から問い直す営みであった。

その結果、玉腰にとって、現代の住居は「すまい」の秩序を喪失し、幼稚化したものとして映っていた。玉腰は、近代以降における生活空間の変容を批判的に捉え、歴史の中に刻まれた「住まいの秩序」を再提示しようとした。玉腰は次のように述べている。

今日のすまいは私人の牙城といいかえてもいいものである。世間に向かって対峙する拠点であると同時に、世間に背を向けて引き籠りうる隠れ家である。そこでは私性があまりに強いあまり、換言すれば世間を隔てる壁が厚いあまり、世間は一樣化されてしまうのである。一樣であるというのは、なるほど内にあるには世間を様々に想像し、それに多様なイメージを与えるものの、世間の実情に対応しないという意味で、一樣にそれは虚無に近いという理由による。<sup>15)</sup>

この指摘において玉腰は、現代社会の「私化」と「一樣化」という相反する現象の根底に、本来的な場所の喪失という構造的問題を見ている。日常的で通俗的な事象の観察を通して、現代の生活に潜む空洞化の問題を鋭く指摘し、建築論の立場から応答しようとしたのである。<sup>16)</sup>

## 6. 小結 —理念と社会のはざまに立つ建築論—

本章の考察を通して明らかになったのは、京都大学建築

論が、森田慶一が有していた社会的視点と探求的視点のうち、理念的・体系的探究を深化させる一方で、社会的実践との接点を次第に失っていったという事実である。そのような傾向の中にあつて、玉腰芳夫は日本の「すまい」を主題とし、現象学的視点を通して生活世界に根差した建築のあり方を問い続けた点で、特異な位置を占めていた。

もっとも、こうした理念的傾向の背景には、建築という語の起源にまで遡り、その内部に建築の本質的意味を内包させようとする、根源的探究としての動機があったと考えられる。すなわち、建築を自立した学として成立させようとする志向が、同時にその理念化をも促したのである。

次章では、この点を踏まえ、建築という語の起源とその意味を改めて検討する。

## II 建築についての包括的観念

### 1. 建築論の語源的起点 — architectonikē technē の意味

森田は私たちの建築に関する包括的観念が古代ギリシアにまで遡ることを指摘し、建築という語の語源的説明の概略を示している。

この語は architectonikē technē の略であつて、「architectōn の technē (術)」を意味する。architectōn は、初・原、首位・頭(かしら)を意味する archē と 工匠・職人を意味する tectōn との合成語である。このことは、ギリシア人が建築を単なる職人あるいは手技(わざ)の工人の術ではなく、原理的知識をもち、職人たちの頭(かしら)に立ち、諸技術を統べ、制作を企画し指導しうる工匠の技術と理解し、そのようなものとして規定していたことを告げる。<sup>17)</sup>

一方、増田は先に記したように「本源や原理を見分ける術、それが architectōn であり、architectonice technē である・・」と述べ、archē の意味を「初・原」として採った。これは archē の根源性に注目するハイデガーの思索を背景にしている可能性がある。

### 2. 古典ギリシア期における tectōn と architectōn — 階層と転換

ここで歴史的展開をジョナス・ホルストの考察を通して確認しておきたい。

古典期において、職人たち (tektones) は、それまでの高い伝統的地位から転落し、哲学者たちによって建築家 (architektōn) の指揮下に置かれるようになった。建築家は、職人を監督する立場として理解されていたのである。紀元前 5～4 世紀の建築家たちは、初期の建築家たちのように構法的な作業過程に深く関与することはなくなり、監督者としての建築家と、実際に作業を行う職人との間に分業が生じた。その結果、職人たち (tektones) は手工業の秩序の中で二次的な地位

へと追いやられることになった。<sup>18)</sup>

(筆者注：tektones は tectōn の複数形である。)

では、紀元前6世紀頃に建築家が登場したとされるそれ以前において、tectōn はどのような職能をもっていたのか。ホルストによれば、かれらは知恵をもち、建築、船、道具などの構造物や工芸品の制作を担い、材料や構造原理を考慮して、調和のとれた世界秩序に適合する技術領域まで担っていた。また、哲学者たちとはプラトン、アリストテレスを指し、かれらの理解によって建築家に高い地位が与えられることになった。

ギリシア古典期において建築家自体が特に高い社会的地位を持っていたわけではないが、プラトンやアリストテレスは、建築家を理論的知識と統率力を有する存在として、いわゆる「卑俗な」職人たち（その中には tektones も含まれる）より上位に位置づけた。<sup>19)</sup>

プラトンは『政治家』259e においては、「建築家というものすべて、この当人は自分で手を下して働く職人ではなくて、職人たちの支配者なのだ。」<sup>20)</sup>と述べ、統括者としての性格を明確にした。アリストテレスは『形而上学』981a において、建築家は「知恵のあるもの、原因を知る者」<sup>21)</sup>であり、単なる職人よりも尊重されるべき存在とした。さらに『ニコマコス倫理学』1152b では、「政治哲学者こそ…終局目的の統括的設定者 (architectōn) である」<sup>22)</sup>と述べ、『政治学』1325b では、「外的な行為においても、行為を思考によって導く建築家のことを、十全にその本来の意味において行為しているとわれわれは言うのである。」と語るほどであった。

### 3. 小結—語源の再構築とその限界

以上のように、古典ギリシア期における architectōn と tectōn の区別に共通して見られるのは、「統括」「支配」という観念であり、そこに archē の意味が負担されていたといえる。

したがって、architectōn の意味は単に archē の辞書的定義から定まるものではなく、哲学者たちの解釈を時代的背景とともに理解する必要がある。この点で、本来の「建築」の包括的観念は、そこに見出すべきだろう。

したがって、「建築」を「アイデアを探り、原理・首位を知る architectōn の術—アイデアを模写しその分有を製作する術」<sup>23)</sup>あるいは「本源や原理を見分ける術」<sup>24)</sup>と定義するのは、語源的観点を踏まえつつも置換した解釈であり、概念的再構築の試みと言える。語源そのものは必ずしもそこまで雄弁ではない。むしろ、後者において示される語源解釈のプロセス<sup>25)</sup>こそ、問題的に検討されるべきだろう。

以上、京都大学建築論の展開を外形的側面から概観してきたが、ここからはその内部構造の理解へと踏み込みたい。その準備として、次章では現代思想における空間概念の

変化とその影響を取り上げ、建築論に新たな視座を与える思想的背景を考察する。

## Ⅲ 現代思潮の建築論への示唆<sup>26)</sup>

### 1. 空間概念の変貌

近代建築においては、建築を「空間」として捉えることが自明の前提とされてきた<sup>27)</sup>と言われる。このときの空間とは、あらかじめ与えられた三次元的な容器として措定されるものであり、その見方は近代科学的思考の延長線上にある。すなわち、世界は測定可能な座標体系のうちに収められ、建築もまた、その容器の内部に形を構成する行為として理解されてきたのである。

しかし、二十世紀に入ると、この空間概念は大きな転換を迎えることとなった。空間はもはや静的な枠組みとしてではなく、知覚・身体・時間の諸契機とともに生成する動的過程として捉え直されるようになる。次項では、この空間概念の変化を、次の三つの観点から概略的に整理する。

- ・空間を生成過程から再定義する視点
- ・感覚質を秩序の受容として捉える拡張的理解
- ・現代物理学との類比関係を示す哲学的考察

### 2. 空間の生成と感覚秩序、そして現代物理学との共鳴

実際の世界は、固定された空間の中に存在しているのではなく、むしろさまざまな活動が生成あるいは持続する出来事の流れである。われわれの経験する「空間」は、その生成過程において一時的に秩序を得た状態である。三次元空間という観念は、この生成の結果を整理し、取り込むために人間が与えることのできた抽象的な枠組である。そのため生成の前提となる可能性は潜在的であり、空間的相をもたない。したがって、建築とは、形を付与すること以前に、未分化で無定形さを含む生成世界のなかから一定の関係をすくい上げ、秩序づける試みである。空間はそうした生成過程のうちに現象として立ち上がるものであり、意味や価値もまたその現象化とともに発現する。

また、この立場は、空間の性格を説明するにとどまらない。空間が生成の過程において現象するものであるならば、そこに与えられているあらゆる感覚的事象——光、音、匂い、温度、素材の手触りなど——もまた同様に、生成的秩序の一契機として理解される。これらは単なる物理的刺激ではなく、世界の生成が感覚の形でわれわれに届く現れである。言い換えれば、感覚質とは、生成する秩序をわれわれの身体が受容し、経験として成立させた結果にほかならない。したがって、空間と感覚は区別されるべき別個の層ではなく、同一の生成過程の異なる側面として結ばれている。建築とは、この生成の秩序を感覚的経験として構成する行為であり、その意味で、形態の創出は感覚の秩序化と不可分である。

このような空間理解は、現代物理学における空間観の転換とも軌を一にする。すなわち、空間を絶対的容器とみなすのではなく、物質や出来事の相互作用によって生成する秩序的関係として捉える点である。相対性理論において、時空は物質の分布と運動によって歪み・生成するものであり、量子論では観測によって初めて現象が確定する。さらに宇宙は場の相互作用の連続的振る舞いとして記述され、粒子はその局所的励起にすぎない。これらはいずれも、世界を静的な実体としてではなく、生成する関係の束として理解する立場に立つ。すなわち、現象は可能性の重なりから一時的に秩序を得て現れるものであり、感覚質もまたこの生成秩序を身体が受容する結果である。建築はこの生成的世界の中で、秩序を可視化する実践であり、形態を通じて生成の過程を経験として現前させる行為である。

### 3. 現象学の建築空間概念

「(森田の)次に登場するのが現象学的な空間論を取り入れた建築空間論である。」(( )内筆者)<sup>28)</sup>といわれるように、京都大学の建築論は現象学を先駆的に取り入れた。

その空間理解は、現象学が提示してきた「世界=現れの世界」としての思考にも連なる。すなわち、空間を客体の容れ物としてではなく、事象が相互に関係づけられつつ現れる地平における場の秩序として捉える点である。現象とは、単に意識に与えられる像ではなく、私たちを取り囲む現実が自らのあり方をあらわす運動そのものである。私たちが感覚を通じて経験する光や音、形や距離のすべては、この開示の仕方として生起する。ここで感覚質とは、生成する秩序を身体が受け取り、志向的に構成する仕方にほかならない。したがって、空間とは、現象の諸契機が互いに交差し、知覚の志向的構成によって立ち現れる秩序としての「開け」の一形態である。建築はこの開けを媒介し、現象の生成を具体的な秩序として留める試みである。建築における形態とは、世界の生成が身体的経験を通して一時的に自己を形象化した相である。

### 4. 小結 一動的な世界観の建築論的展開一

これらの概念的考察に通底するのは、静的・確定的な世界観を離れ、生成的・関係的・流動的な世界像へと回帰しようとする志向にある。その目的は、近代科学思想のフィルターを介して限定的に把握されてきた諸事象・意味・人間の価値を解き放ち、それらをあらためて私たちの生活世界のうちに取り戻すことにある。

とりわけ建築においては、物体性と質(価値)が密接に交錯する領域であるため、この観点から生活世界の構築を再検討することが求められる。また同時に、この試みは、森田が芸術や超越性として捉えた建築の空間的側面を、人間存在のための建築のあり方へと拡張する契機ともなりうる。ただし、森田が現象の様態として論じた建築の芸術的

性格については、別途詳細な考察を要するであろう。<sup>29)</sup>

もっとも、今日においては、社会の一部や多くの建築家がすでにこのような空間の実相に着目し、建築に多様な意味や価値を付与しようと試みている。その際には、場を読み込み、その場に応答しながら空間を構築する実践がなされているといえよう。

したがって、私たちは改めて建築論の原点に立ち返り、この基礎的実相を共有しうる知の体系として構築していく努力が求められるであろう。

そしてここから二様の方向が生まれる。

1) 拡張された空間概念の下で、場に開かれる秩序の考察することが求められる。それは生活世界を充実させるものは何か、それはまた、出発点である身体知覚の次元を超えて何を求めるかという目的を問うことになる。

2) 1) をもたらすことは、今日の生産行為のモデルでは明らかに不可能だから、建築の制作の姿をどのように描くことができるか。

1) については「実存論的空間分析」<sup>30)</sup>として紹介され、その端緒を拓いた者として増田友也が特筆されているが、玉腰芳夫の論考を基本にしてIV章で考察する。

2) の視点は、結論的に言えば実存論的空間論の掌中に収まらないと見られる。V章で考察を試みる。

## IV 知覚的場から引受的場への転換と共同体・歴史の継承

### 1. 場の一般的理解の反省

建築の「場」を考えると、そこで人が空間を経験するということは、同時にその場に潜む他者の気配、歴史の層、共同の営みの活動を感じ受する階層の中で生きているということである。したがって、建築を「知覚の対象」として扱うことと、生の重層性の中で「場を引き受けるもの」<sup>31)</sup>として構想することのあいだには、世界の受け取り方そのものを分ける決定的な差異がある。

「場を知覚する」あり方では、人と空間との関係はあくまで観察的である。歴史や文化、慣習といった要素は、再現され、参照される対象として扱われやすい。過去の様式や形態、地域的特性は、設計者の意識において、意味は受け入れられても形式的な知覚の素材のままである。ここでは、文化的記憶は個人の経験の中で感受されるにとどまり、その結果、建築における「文化の継承」は、視覚的・象徴的再現となって生気を失う危険を伴う。文化は「見るもの」として表層化され、生活世界の深層における連関を失ってしまう。

### 2. 近代建築とポストモダニズムの地平

このような「場を知覚する」構造において、文化や歴史

を視覚的記号として再構成する手法は、ポストモダニズムの建築において顕著に現れた。近代主義が抽象化と普遍化によって共通の原理を求め、文脈（文化的・歴史的・社会的差異）を排他的に扱ったのに対し、ポストモダニズムはその反動として、地域性や伝統、象徴性をデザイン言語の中に再導入した。しかしそれは、文化を再び生きられた文脈として立ち上げるのではなく、むしろ操作可能な記号体系として取り扱った。歴史的モチーフや様式の引用は、意味を再生成するというよりも、視覚的效果や多義的表象を目的とする「文脈の演出」に近かったのである。

そのため、文化や記憶は経験に与える生成的力としてではなく、「表象される文脈」として固定化された。ポストモダニズムが掲げた「多義性」や「複層性」は、表面的には文化的寛容・多様性を装いながらも、実際には文化をデザインの素材へと変換する操作を正当化したといえる。文化が単なる参照物となるとき、建築は現象学がいう〈大地〉——生の根拠的な場——から切り離され、文化を「生きる」行為としてではなく「表象する」装置としてしまう。結果として、そこにあるのは過去の再現ではなく、過去の記号的消費であり、文化の再生ではなく文化の模倣となる。

近代建築思想は、機能に形態原理の可能性を託し、純粋空間に建築空間の地位を与えて、それを「属性化」したのと同様に、ポストモダニズムは、「意味」や「装飾」といった象徴的契機を抽出し、操作可能な記号として扱った点で、同一の思想的地平に属する運動として理解されるだろう。<sup>32)</sup> 言い換えれば、ポストモダニズムは、近代主義の対象領域を修正しながらも、その背後にある思考の構造を根本的には問い直すことができなかったのである。ここには、建築が〈場〉を単なる知覚の対象として扱い続け、そこに潜む共同体的・歴史的生成の力を受け止める契機を欠いていたという問題が見て取れる。次節で扱う「場を引き受ける」構造は、まさにこの欠落を超えて、建築を共同の生の継承と生成の場として捉え直す視座である。

### 3. 共同体的・歴史的連続性を担う出来事の場合

「場を引き受ける」立場においては、建築は単に個人の感覚を刺激する対象ではなく、共同体的・歴史的連続性を担う出来事の場合として理解される。そこでは、建築は人々の生活の積層と結びつき、土地の記憶、風土の変化、社会的関係の生成を媒介する存在となる。人はそこで過去の出来事を想起し、他者との関係を結び直しながら生きる。すなわち、場を引き受けるとは、個人の知覚を越えて、共同体的経験の継承を身体的に担うことを意味する。このとき建築は、歴史を保存する装置ではなく、歴史を「生かし続ける構造」として機能する。

しかし、このように場を引き受けることは、単純な継承ではなく、創造的な再解釈を伴う。なぜなら、共同体や歴

史は常に生成の過程にあり、過去の形式をそのまま再現することはできないからである。したがって、建築が共同体や歴史を引き受けるということは、それらを新しい文脈のもとで再び開き直すことを意味する。それは、文化の変容を許容しながらも、その根底に流れる生活世界の構造——すなわち人と人との関係、人と自然との応答、日常的営みの織り成す秩序——を見失わない態度である。ここにおいて、建築は「歴史を形にするもの」ではなく、「歴史が現在を通して語るための場所」となる。

### 4. 玉腰の建築論

玉腰の研究が示したのは、まさにこの「場を引き受ける」思考の方向であった。玉腰は建築における場所秩序の探究を通して、現象学が指し示した生活世界の根底にある共同体性と歴史性を汲み取り、それを建築的空間認識へと転化しようとした。つまり、場所は、私たちの意識に先立ってすでに開かれており、そのもともとの構造のなかには、恣意的（一方的）な解釈を受け入れない他者との関わりや時間の積み重ねが織り込まれ潜在化している。建築はその「与えられたもの」を再び意識化し、現代の環境において新たに構成し直す実践である。このとき「引き受ける」とは、過去を保存することではなく、生活世界がもつ共同的・歴史的意味を現前化することである。

### 5. 小結 —「場の引き受け」から「場の生成」へ—

従って、知覚的場から引受的場への拡張は、建築の美的・感覚的問題を越えて、建築の社会的・歴史的次元を取り戻す試みである。そこでは、建築が「誰のために、何を継ぐのか」という倫理的問いも伴う。場を引き受けるということは、他者の生の時間を自らの設計行為のなかに抱き込むことであり、時間と関係の責任を担う行為にほかならない。

こうした観点から見ると、建築における文化の継承とは、静態的な伝統の再生ではなく、共同体の記憶が今を通して共時的に再び生き始めるための生成的な契機となるだろう。

しかし、ここでの考察はなお表層的であることを免れない。建築が「場」としてどのように実現しているのか——すなわち、場の構造がいかなる仕組みによって生成し、持続しているのか——については、十分な説明が与えられていないからである。<sup>33)</sup> とりわけ、自然物ではなく人工物としての建築において、「場の形成」は制作行為そのものに起点をもつと考えられる。したがって、建築における場の問題は、単に経験的に与えられるものではなく、制作的契機を通じて生成する構造として捉え直す必要があるだろう。

## V 生活世界から生成世界へ——制作的哲学の展開

### 1. 「住まう」思想と建築的統括の問題

現象学から展開された思想においては、近代が形成して

きた主観中心的世界像を解体し、私たちがすでに身を置いている具体的な生の場へと回帰することが試みられた。ここでは、人間と場の関係は「住まう」という表現に集約され、場所は主体の外部に存在する客観的な容器ではなく、事象が相互に関係づけられつつ現れる「開け」の地平として理解される。この視点は、建築が場を成立させる媒介であることを照らし出すという点で重要である。

しかし、この「場所への回帰」の思想は、建築という概念が本来的に含んでいた諸要素を総合し統括する行動的視点をその内部には持ちえない。現象学的思考は、場所にすでに与えられた意味の構造を明らかにすることには貢献したが、その構造の中でいかに場を構成し、生成し、建築として立ち上げるかという問題には十分踏み込めなかったのである。すなわち、現象学は「そこにある場」を記述するという能動性が限界であり、統括的に「場を生み出す」制作的契機は思想の射程外と思われる。

言い換えれば、現象学的地平は建築論にとって重要な基礎を与えるが、それは根拠の回復の段階にとどまり、建築的統括（総合・構成の原理）へと移行する前段階である。

従って、建築の場を問うことは、場所の意味を受け止めることだけでなく、その意味を制作行為に踏み込み、いかに制作行為を通じて組み立てられるかということに導かれる。

## 2. 〈場〉を引き受ける制作の論理

従って、制作行為を現象学的地平の内部に閉じ込めるのではなく、これまで見てきた〈場〉との関係に開き直して整理すれば、制作は次のような構造をもつと考えられる。

1) 制作は、すでに開けている〈場〉から始まる。

ここでいう〈場〉とは、歴史的・社会的・身体的・物的・時間的な層が織り重なり、潜在的な秩序として存在している地平である。

2) 制作は、その潜在的な秩序を統合し顕在化させるプロセスである。

すなわち、制作とは単に「新しい形態を創出する」ことではなく、〈場〉に織り込まれた意味の層を引き受け、それを現前化する営みである。

3) 制作者は、秩序の「起源」ではなく、その媒介者・調律者である。

ここで制作者に求められるのは、一から世界を構築することではなく、潜在的秩序に応答し、その現れ方を調整し、導く働きであり、いわゆる芸術的な創造とは異なる一面をもつ。

このようにして制作された〈開け〉—すなわち具体的な空間や形式—は、生活や習慣のなかで反復されることで文化的記憶として根づき、共同的経験を形づくる契機となる。

こうした「制作を通じた〈場〉の生成」の過程に関心を寄せるとき、京都大学における建築論がプラトンやアリストテレスの哲学にその展開の可能性を見出そうとしていた

意義が、あらためて理解されるだろう。すなわち、〈場〉と制作の関係を、生成の論理として構想しようとする試みがそこにあったのである。

## 3. 建築論の西洋古典への関心

京都大学における西洋古典学の発展、なかでもプラトンおよびアリストテレス研究の確立は、建築論における生成と制作の問題意識を形成する重要な基盤となった。建築が機械論的な構造物ではなく、生成の秩序を構成する営みとして理解されうるという視点は、両者の哲学が有する世界観と深く共鳴するものであった。

ここで建築論にとって重要となるのは、生成・制作・秩序化がどのような構造を持つのかという内的関連性を明らかにすることである。しかし、これまでの研究は、多くの場合、文献に現れる用語や概念を建築的観点から追跡するにとどまり、現代の建築的課題へと接続し得る形で再構成されてきたとは言いがたい。<sup>34)</sup> その背景には、ギリシア哲学が私たちとは異なる観念体系の上に成立しており、語の直接的な対応関係をたどるだけでは思想の射程が十分に引き出されないという事情があるだろう。

さらに、既往研究の多くは、建築の制作において経験される具体的な行為と、原理とのあいだを媒介する視座を十分に提示してこなかった。言い換えれば、「理念」の次元と「制作」の次元の往還をどのように記述するかという問題が、ほとんど扱われてこなかったのである。

今日、建築家が「建築とは空間である」「建築とはアクティビティである」と語るとき、そこで示されているのは特定の対象の定義ではなく、未来へと開かれた生成の契機である。したがって、問うべきことは「制作とは何であるか」という静的定義ではなく、その生成の契機がいかにして制作行為において実現されるのかという問題である。

## 4. 小結——制作を考える方途（ホワイトヘッド的生成論）

このような問題意識の延長線上に位置づけられるのがホワイトヘッドである。ホワイトヘッドは、プラトン研究を起点としながら独自の哲学体系を築き上げた思想家であり、その思考の系譜は後にアリストテレスの思索との近接性も指摘されている。ホワイトヘッドを注目する理由は、ギリシア哲学の発展と蓄積を、近代以降の世界観を踏まえて再構成し、世界を生成する出来事として捉える枠組みを提示した点にある。

ホワイトヘッドは次のように述べている。

哲学の歴史は、それぞれ別の時期にヨーロッパの思想を支配してきた二つの宇宙論を顕わにしている、その一つはプラトンの『ティマイオス』、他はガリレオ、ニュートン、ロックを主な創始者とする十七世紀の宇宙論である。ここで同類の企てを試みるにあたって、次のような導きの糸に従うのは賢明だろう。すなわち、

おそらく真の解決は、上述の先行する二つの構図を、自己整合性と知識の進歩によって要求される変様を加えながら融合することにある。<sup>35)</sup>

ホワイトヘッドが示したのは、世界を静的な実体の集積としてではなく、関係がつねに生成し続ける場として捉える視点である。この考え方は本論の立場と重なる。ただし、その哲学体系は広範で複雑であり、建築論から接近することは容易ではなく、ある種の冒険である。しかしそれでも、ホワイトヘッドの視点は、建築の制作行為を〈場〉における創造として理解するための理論的基盤を与える点において、参照する意義を有している。

## VI 総括——建築論の自制的視座

建築は、森田が『建築論概説』で示したように、建築としての自己同一性（全体としてのまとまり）をもつ。すなわち、構法・素材・力学に支えられた技術的基盤（強）、身体スケールや光・運動に関わる空間的秩序（美）、そして社会的・文化的背景をふまえた生活世界との適合（用）。これら三層のカテゴリーが統合されることによって、建築は「建築であること」を成立させている。建築論が扱える内容は、本来この枠組みへと変換しうるのははずであり、もしそうでないとなれば、何らかの新たな包括的限定を提示しなければならない。

そして、Ⅳにおける考察で見たように、建築がこれらの性質のカテゴリーではなく「場」の顕れとして捉えられるとき、建築は世界の開けに関わる契機を帯びる。光や静けさ、歴史や文化が、個々人の経験を超えて共有可能な意味を生成するとき、建築は世界が私たちに現れてくるあり方を示す場となる。この段階で建築は、自己同一性をもつ制作物であると同時に、関係によって立ち上がる「出来事」としての性格を帯びる。建築はもはや人を包む容器ではなく、人と世界を媒介する場となる。

この「場所的なあり方（建築を身体・社会・文化へ開く次元）」を十全に捉えるためには、制作的契機の視点を組み込む必要があると考えた。しかし、Ⅴにおいて見たように、制作のあり方はなお十分に説明されているとは言えず、場の理解において現象学の視座を必要としたように、制作を記述するためには別の哲学的領域への架橋が求められる。この探求は今後の課題として進められるべきものであるが、同時に、常に森田が示した包括的観念としての建築にとどまりうるかを自覚的に反省し続けなければならない。すなわち、建築の本分を忘れないことが前提となる。

建築論の進展は、森田が築いた基盤の上に成立する運動である。

## 〈文献〉

- 1) 森田慶一：『建築論』、東海大学出版会、1978年
- 2) 増田友也：増田友也著作集Ⅴ、ナカニシヤ出版、1999年
- 3) 玉腰芳夫建築論集編集委員会編：すまいの現象学—玉腰芳夫建築論集一、中央公論美術出版、2013年
- 4) 日本建築学会編：建築論事典、彰国社、2008年
- 5) R.G. コリングウッド：『自然の観念』、みすず書房、1974年
- 6) A.F. ホワイトヘッド：『ホワイトヘッド著作集第6巻 科学と近代世界』、松籟社、1981年
- 7) 前川道郎：「学としての建築論とその研究の道」、『建築論の展開を目指して 昭和59年度建築歴史・意匠部門研究協議会資料』、1984年
- 8) 大宮萌恵：空白となった超越的なもの——森田慶一による1938年夏の南洋群島調査滞在、日本建築学会計画系論文集 第89巻 第817号、568-577、2024年3月
- 9) Holst, J 2017 The Fall of the Tektōn and The Rise of the Architect: On The Greek Origins of Architectural Craftsmanship. Architectural Histories, 5 (1) : 5, pp. 1-12, DOI: <https://doi.org/10.5334/ah.239> (参照日：2025年10月23日)

## 注)

- 注1) ( ) 内は生年と没年を示す。以下同じ。
- 注2) 文献1)、「まえがき」p. i
- 注3) 文献1)「建築論概説」、P.5
- 注4) 同上、p.5
- 注5) 同上、p.5
- 注6) 同上、p.107
- 注7) 文献8) 参照
- 注8) 文献2) 第Ⅴ巻「第8章 建築以前(退官講義)」、p.301
- 注9) 同、「附章 仮題「建築とは何か」(未定稿・ノート含む)」
- 注10) 同、「第9章 建築について」p.330
- 注11) 文献7、p.2
- 注12) 文献1、「建築論概説」、P.3
- 注13) 文献7、p.1
- 注14) 文献3)、「建築的場所、とりわけその大地性について」p.320
- 注15) 同上、「建築の可能性を目指して」、p.515-516
- 注16) もとより玉腰の考究はここに終わるのではない。参考文献3)の目次にみられるように、浄土教建築に目を向けている。そこでは日常的な世界を超えた地平における建築の構成原理を問おうとしている。

- 注 17) 文献 1)、「西洋建築思潮史」、p.161  
 古典文献のデジタルライブラリー：Perseus Digital Library で単語使用頻度を調べると、アーキテクトニケー (ἀρχιτεκτονική) の単語の使用例は非常に限られており (計 15 例)、アリストテレスに集中する (8 例)。アリストテレス以前ではプラトンに 1 例があるのみである。  
<https://www.perseus.tufts.edu/hopper/wordfreq?lang=greek&lookup=a> rxite%2Fktnw (参照日：2025 年 10 月 23 日)  
 参考に、その他の単語の使用頻度を示すと、テクネー 6,398 例、アーキテクトン 109 例、テクトン 262 例となっている。アーキテクトニケーは当時のギリシア世界で一般に流通する語ではなかっただろう。
- 注 18) 文献 9)、「Conclusion」
- 注 19) 同上
- 注 20) プラトン：『政治家』(水野有庸訳、『プラトン全集 第 3 巻』、岩波書店、1976 年)、出典邦訳による。
- 注 21) アリストテレス：『形而上学』(出隆訳、『アリストテレス全集 第 12 巻』、岩波書店、1968 年)、p.5  
 以下の訳文を参照。棟梁と訳されたものがアーキテクトーンである。  
 「それゆえまたわれわれは、棟梁をば、その仕事の一家に関して下手の職人たちより遥かに尊重されるべき者であり、いっそう多く知っている者であり、したがっていっそう多く知恵のあるものである、と考えもするのである。というのは、かれがそのする仕事全体の原因を知っているがゆえにある。」
- 注 22) アリストテレス：『ニコマコス倫理学』(神崎繁訳、『アリストテレス全集 第 15 巻』、岩波書店、2014 年)、p.300 出典邦訳による。本文中の (architectōn) は筆者による補記であり、原文ギリシア語 ἀρχιτέκτων をラテン文字に転写したもので、邦訳本文に含まれる表記ではない。
- 注 23) 文献 3)、「建築論」、p.14
- 注 24) 文献 2) 第 V 卷「第 8 章 建築以前(退官講義)」、p.301
- 注 25) 同上、p.286-301
- 注 26) 主として参考文献 3)、4) による。
- 注 27) 文献 3)、「古代日本のすまい—建築的場所の研究—」、p.3
- 注 28) 文献 4)、「空間」、p.35
- 注 29) この論述に従い空間概念を場へと拡張したとしても、建築の芸術的性質についてはなお検討を要する。芸術概念は近世に成立した歴史的枠組みであるため、建築を芸術とみなすとき、その概念が建築理解にどのような前提と制約を持ち込んでいるかを慎重に見極める必要がある。
- 注 30) 文献 4)、「空間」、p.37
- 注 31) 「場を引き受ける」という表現は、特定の哲学用語を直接指すものではなく、人が与えられた場の条件や背景を受け止めながら、それを生活・生き方や制作の契機として担うことを意味するものとして用いている。
- 注 32) ここでいう「属性化」とは、新たに立ち現れる可能性を明確化するために、その契機に強い焦点を当て、他要素からいったん切り離して独立した価値軸として扱う概念的操作を指す。この操作は、対象から特定の性質を抽出し、それを定式化する近代科学に特徴的方法と対応している。無定形な状況を分析可能な区分へと分節化する点で一定の意義をもつものの、それ自体は多様な関係を統合するための原理とはならない。  
 建築は本来、複数の価値や条件を相互に関連づけ、その総体として成立する実践または経験領域であるため、属性化にもとづく結果を建築的秩序として把握することには限界がある。機能主義とポストモダニズムは、どの価値に焦点を当てるかという点では異なるが、前者はその価値を単一の本質に還元しようとし、後者は別の価値さえも新たな本質へと帰属させる点で、価値の扱い方に関する思想的前提において共通性と相違をあわせもつ。
- 注 33) 文献 3)「阿弥陀仏のすまい」、p.511 玉腰による取組を注目すべきと思う。
- 注 34) 文献 4)、「建築」、p.14-15 など
- 注 35) A.F. ホワイトヘッド：過程と実在 1、みすず書房、2023 年、序 p.xvii